

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：25502

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K17465

研究課題名(和文) 看護基礎教育の工夫による新卒看護職の職業的アイデンティティ確立に関する研究

研究課題名(英文) A study on the establishment of professional identity in new graduate nurses by making efforts during basic nursing education

研究代表者

白蓋 真弥 (Shirafuta, Maya)

山口県立大学・看護栄養学部・助教

研究者番号：20807317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、看護基礎教育により養成される看護実践能力および社会的スキルのどの要素が、新卒看護職の職業的アイデンティティ確立に強く関連しているのかを明らかにし、それを踏まえて、職業的アイデンティティを高める教育の工夫を提言することである。調査の結果、入職後3か月時の職業的アイデンティティと入職時の看護実践能力および社会的スキルには弱い正の相関があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢化や医療技術の高度化と国民の健康意識の高まりなどにより、量と質の両方においての看護に対する社会のニーズが増大している。看護職は、適切な教育を基盤に就業を継続し、経験を重ねて能力を高めていく職種であり、入職した看護職が継続して働くことは重要である。看護職が質の高い看護を実践していく上で、職業的アイデンティティが重要であると考えられており、本研究結果は入職後早期の看護職の職業的アイデンティティ確立に関する知見となる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the relationship between professional identity after starting work, and practical abilities or social skills in new graduate nurses, and to suggest the ways to establish the professional identity. As a result, there were weak positive correlations between professional identity three months after starting work, and practical abilities and social skills, respectively, at the start of work.

研究分野：基礎看護学

キーワード：職業的アイデンティティ 看護実践能力 社会的スキル 看護基礎教育

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 高齢化や医療技術の高度化と国民の健康意識の高まりなどにより、量と質の両方においての看護に対する社会のニーズが増大している。また、平成 28 年度の看護職就業者数は 166 万人だが、団塊の世代が後期高齢者となる 2025 年には、202 万人の看護職が必要であると推計されている(引用文献)。看護職は、適切な教育を基盤に就業を継続し、経験を重ねて能力を高めていく職種であるため、看護職の質向上のためにも、入職した看護職が職場に適応して働き続けることが大切である。専門職としての基礎を学んだ新卒看護職が早期に離職することは社会的な損失であり改善は急務である。

(2) 看護職が質の高い看護実践を継続していく上で、看護職の職業的アイデンティティが重要であると考えられているが、新卒看護職は、着任時に比べて入職後 3 か月時に職業的アイデンティティが有意に低下することが明らかになっている(引用文献)。このように新人期の看護職にとって入職後 3 か月時は危機的状況に置かれる時期であり、入職後早期の職業的アイデンティティをいかに確立し、この時期を乗り越えるかは、その後の職業継続に大きく関わると考えられ、重要な課題である。

(3) 新卒看護師の職業的アイデンティティの確立に関わる要因は、環境特性の因子と個人特性の因子に大別されることが報告されており、環境特性の因子として、これまでに業務支援やプリセプターからの支援を含む職場の様々な支援体制や現任教育が報告されている(引用文献)。一方、新卒看護職の職業的アイデンティティの確立に関連がある個人特性の因子についての報告は少なく、新卒看護職に特化した職業的アイデンティティ確立に関する研究は少ないのが現状である。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、看護基礎教育により養成される看護実践能力および社会的スキルのどの要素が、新卒看護職の職業的アイデンティティ確立に強く関連しているのかを明らかにし、それを踏まえて、看護基礎教育における教育の工夫について示唆を得ることである。

### 3. 研究の方法

(1) 新卒看護職の入職後 3 か月時の職業的アイデンティティに関連する入職時の看護実践能力および社会的スキルの要素を特定するための質問紙調査を以下の方法で行った。

(2) 全国の病床数 200 床以上の病院に新卒として入職直後の看護職で、研究協力の同意が得られた人を対象とした。日本病院会ホームページの会員一覧の中から全国の約 1000 病院に協力を依頼し、同意が得られた病院を対象とした。

(3) 無記名式で 2 回の縦断的質問紙調査を行い、ペンネームおよび記号により 2 回の調査結果を対応させた。調査時期は、第 1 回調査を平成 30 年 4 月(新卒看護職の入職直後)に、第 2 回調査を平成 30 年 7 月(新卒看護職の入職後 3 か月)に実施した。

(4) 第 1 回調査(入職直後)の内容は、属性、看護実践能力：学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標(引用文献、5 群 55 項目)、社会的スキル：社会的スキル尺度 KiSS-18(引用文献、6 領域 18 項目)、職業的アイデンティティ：看護師の職業的アイデンティティ尺度(引用文献、20 項目)であった。第 2 回調査(入職後 3 か月時)の内容は、現在の勤務状況、看護実践能力、社会的スキル、看護師の職業的アイデンティティ尺度であった。

(5) 2 回の質問紙調査結果について記述統計を行った。入職時の看護実践能力および入職時の社会的スキルと入職後 3 か月時の看護師の職業的アイデンティティ(PISN)との関連性について、Pearson の相関係数を求めて検討した。

(6) 本研究は山口県立大学生命倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号：30-4)。調査票への回答は対象者の自由意思であり、回答を拒否した場合であっても不利益などは受けないこと、得られたデータは本研究以外で使用しないことを、対象者に文書で説明した。また、質問紙の返送をもって研究への参加に同意したとする旨を説明した。

### 4. 研究成果

(1) 第 1 回調査は配布数 4151 枚、回収数 1741 枚、回収率 41.3%、有効回答率 36.8%であった。第 2 回調査は配布数 4151 枚、回収数 1114 枚、回収率 26.8%、有効回答率 23.9%であった。両方の調査結果を連結できたのは 551 枚、有効回答率 13.3%であり、この 551 枚を分析対象とした。対象者の属性は、男性 35 名(6.4%)、女性 516 名(93.6%)で、年齢は  $23.4 \pm 4.5$  歳であった。看護師国家試験受験資格を取得した教育機関は、専門学校が 341 名(61.9%)、大学が 154 名(27.9%)、高等学校の衛生看護専攻科が 36 名(6.5%)、短期大学が 19 名(3.4%)、その他が 1 名(0.2%)であった。

(2) 第1回調査における入職時の看護実践能力の総合計点は123.6±28.6点であった。群の「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」(8問)は20.9±4.7点、群の「根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」(16問)は36.0±9.1点、群の「特定の健康課題に対する実践能力」(15問)は28.9±10.0点、群の「ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力」(13問)は29.1±8.1点、群の「専門職者として研鑽し続ける基本能力」(3問)は8.6±2.1点であった。社会的スキルKiSS-18の総合計点は57.1±9.1点であった。初歩的なスキル(3問)は9.7±2.4点、高度のスキル(3問)は9.9±1.9点、感情処理のスキル(3問)は9.3±1.8点、攻撃に代わるスキル(3問)は9.6±1.8点、ストレスを処理するスキル(3問)は9.6±1.9点、計画のスキル(3問)は9.0±2.0点であった。看護師の職業的アイデンティティ(PISN)の合計点は、59.9±8.0点であった。

(3) 第2回調査における入職後3か月の看護実践能力の総合計点は126.5±28.5点であった。群の「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」(8問)は21.2±4.6点、群の「根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」(16問)は37.7±8.8点、群の「特定の健康課題に対する実践能力」(15問)は30.3±9.8点、群の「ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力」(13問)は29.0±7.9点、群の「専門職者として研鑽し続ける基本能力」(3問)は8.5±2.1点であった。社会的スキルKiSS-18の総合計点は55.9±9.9点であった。初歩的なスキル(3問)は9.8±2.3点、高度のスキル(3問)は9.7±1.8点、感情処理のスキル(3問)は9.1±2.0点、攻撃に代わるスキル(3問)は9.3±1.9点、ストレスを処理するスキル(3問)は9.3±2.1点、計画のスキル(3問)は8.8±2.1点であった。看護師の職業的アイデンティティ(PISN)の合計点は、60.2±8.0点であった。

(4) 入職時の看護実践能力と入職後3か月時の看護師の職業的アイデンティティ(PISN)との関連について、入職時看護実践能力の5つの能力群の各点数と入職後3か月時の看護師の職業的アイデンティティ(PISN)の合計点数との相関を分析した。看護実践能力の総合計点数については、職業的アイデンティティ(PISN)と弱い正の相関( $r=.297$ )があり、看護実践能力の各群の各点数についても職業的アイデンティティ(PISN)と弱い正の相関があった。

(5) 入職時の社会的スキルと入職後3か月時の看護師の職業的アイデンティティ(PISN)との関連について、入職時の社会的スキル(KiSS-18)の6領域の各点数と入職後3か月時の看護師の職業的アイデンティティ(PISN)の合計点数との相関を分析した。社会的スキルの総合計点数については、職業的アイデンティティ(PISN)と正の相関があり( $r=.361$ )、社会的スキルの6つの領域の各点数についても、職業的アイデンティティ(PISN)と正の相関があった。

(6) 本研究では、入職前までの看護基礎教育において養成可能で、看護職の職業的アイデンティティに影響を及ぼす要因として、特に入職時の看護実践能力および社会的スキルの2つの個人特性に着目した。その結果、それらと職業的アイデンティティとの間に一定の相関関係を見出すことができた。看護職が質の高い看護を実践していく上で、職業的アイデンティティが重要であると考えられており、本研究結果は入職後早期の看護職の職業的アイデンティティ確立に繋がる知見と考えられる。

#### <引用文献>

- 厚生労働省 (2019). 医療従事者の需給に関する検討会 看護職員需給分科会 中間とりまとめ <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000567572.pdf>. (参照2020年5月29日)
- 落合幸子, 紙屋克子, マイマイティ・パリダ, 高木有子, 落合亮太, 本多陽子, 黒木淳子, 服部満生子 (2007). 看護師の職業的アイデンティティの発達過程. 茨城県立医療大学紀要, 12, 75-82.
- 三輪聖恵, 志自岐康子, 習田明裕 (2010). 新卒看護師の職場適応に関連する要因に関する研究. 日本保健科学学会誌, 12(4), 211-220.
- 文部科学省 (2011). 学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/47/siryu/\\_icsFiles/afieldfile/2011/11/04/1312488\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/47/siryu/_icsFiles/afieldfile/2011/11/04/1312488_5.pdf) (参照2020年5月29日)
- 菊池章夫 (1988). Social Skill 尺度の作成, 東北心理学会 42 回大会発表. 東北心理学研究, 38, 67-68.
- 佐々木真紀子, 針生亨 (2006). 看護師の職業的アイデンティティ尺度(PISN)の開発. 日本看護科学学会誌, 26(1), 34-41.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 白蓋真弥、中村仁志
2. 発表標題 新卒看護職の看護実践能力及び社会的スキルと職業的アイデンティティの関連性
3. 学会等名 日本看護研究学会第44回学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----